

〔和漢三才圖會八十四〕榑 倭字 坂樹 日本紀 賢木 本朝式 龍眼木 漢語抄 和名佐加岐正字未詳

按、榑本朝神社必用之木、猶浮屠用木蜜、其木葉似木蜜而葉小、色深青無香、四時不凋、開小白花、結子生青熟紅。

〔松屋叢考〕三樹考

今三樹といふは、賢木は桂、楠、櫟、廣心樹などの總名、加豆良乃木は櫟、木犀などの總名、櫟は天竺桂

の類の總名なれば、この三種をとり出て、説を立るがゆゑなり、賢木は、香き常葉木のことにて、常

木なるよしは、源氏櫛に、かばらぬ色、桂、楠、櫟、廣心樹などをいへど、ことさらに賢木とて、神事に用

るは、櫟なり、白多夫の總名なり、そは眞木はもと被檜杉などの類を、美樹とほめし名なれど、字万

眞な中に、一種被としも稱は、今の高野被なるがごとし、高野被、坂東には、少くは、檜杉など、北國中國西國

りといへり、古事記卷上に、天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而、中略神代紀上卷、古語拾遺同

津も五百津の約なり、五百箇眞賢木と書り、五百津は枝の繁きをいふ、湯津風の湯、また武の段、神武

天皇の御歌に、伊知佐加紀、微能意富、邪久袁云々、神武紀同、伊知は伊都の通音、嚴櫃といふに、おな

れぬよしといへるは、中々にうけがたし、神功紀に、撞賢木嚴之御魂云々、撞は齋に、齋潔まはる、榑

などみえ、この外古書に名の顯れたるは、擧に違あらず、こを賢木坂樹と書るは、假字なり、神樹葉

四と書るは、神事に用る木なればなり、榑日本後紀十、は神木の合字にて、麻呂を鷹、堅魚を鯉に作

る類なり、榑鏡は、祀木の合字、神祀る木のよしなり、榑鏡は、未詳、杜鏡は、神の杜にある木の心也、龍

眼木字鏡、和は、その形容の似たれば、借用て書るなり、名義は舊説に、榮樹サカキにて、なにもあれ、常葉

樹の榮立るにいひ、卷古、事記傳八の卷、靜山、隨筆、冠辭考九の中にも、榑木の事ならんと、冠辭卷い

へるは、うけがたし、今按に、賢木は、小香木なり、まづ左といふ辭に、五の差別あり、小言、小雨、小枝、小

躍、小間、无、小竹、小々形、の錦、細石、小々浪などの左は、小き心なり、狹筵、狹疊、さおりの帯などは、狭き